

Editorial Comment

小脳 pleomorphic xanthoastrocytoma の 1 例

山形大学医学部脳神経外科 佐藤慎哉

Pleomorphic xanthoastrocytoma は, astrocytic tumors の 1%未満と稀な腫瘍であり, 発生部位としては大脳半球に多く, 本論文のごとき小脳発生例は, これまで 11 例の報告をみるのみであり, その症例報告は価値あるものである.

著者らは, 過去の 11 例に自験例を加えた 12 例の小脳 pleomorphic xanthoastrocytoma の臨床像, 病理像を検討しており, 大脳発生症例と小脳発生症例の臨床症状の差に関して, テント上とテント下, 表在性と脳深部という腫瘍の発生部位に依存していることを明らかにしたが, これは従来の報告と同様であり新規性は乏しい. しかしながら, 本論文では, さらに腫瘍の脳内の局在から腫瘍の発生母地の違いにまで言及しており, その考察はきわめて興味深く, 本論文を価値あるものに行っている.

治療に関しては, 本腫瘍は WHO grade II の腫瘍であり, 著者らが述べているように摘出術が第一選択である. 摘出術後の残存腫瘍に対する補助療法の有効性に関しては, 稀な腫瘍であることもあり, これまでまとまった検討がなされておらず, 現時点では controversial である. ただし, 本腫瘍の中には核分裂像が散見される症例があり, さらに核分裂像の程度が独立した予後規定因子とされていることから, 核分裂像が散見される場合には術後の補助療法を考慮すべきと考えられる. また, 初回手術時には核分裂像, 壊死像などが認められなかったが, 術後に残存腫瘍の急速な増大を呈した症例報告もあり, 残存腫瘍のある場合には, 摘出した腫瘍には核分裂像がわずかであっても厳重な経過観察が必要であろう.

小脳発生多形黄色星状細胞腫

(pleomorphic xanthoastrocytoma ; PXA) について

名古屋大学医学部脳神経外科 若林俊彦

多形黄色星状細胞腫(pleomorphic xanthoastrocytoma ; PXA) は, 1979 年に Kepes らが提唱した概念であり, 一般的には大脳半球の表在性限局性囊胞性腫瘍で, 小児や若年成人に好発する. 組織学的には腫瘍細胞は細胞質内に脂肪滴を含み多形性を呈するものの, 増殖能は低く, WHO 分類では grade II に属し, 一般的に良性とされる. PXA の症例発生頻度は, 星細胞系腫瘍全体の 1%未満とされ, 報告総数も 180 例程度である. 今回の貞友らの報告のように, 小脳虫部に発生した PXA 症例と類似した例は, 1994 年に Scheithauer らの報告などがあるが, きわめて稀である. 本症例は, 一般的な PXA と異なる点として, ①表在性局在でなく, 軟膜と接していない, ②囊胞を形成していない, ③腫瘍内の好銀線維の発達形成が乏しい, などが挙げられる. 考察として,

PXA の小脳発生例は, ①表在性よりは深部に発生することが多く, そのため, ②頭蓋内圧亢進症状に伴う頭痛が初発症状となること, また, ③囊胞性より充実性の腫瘍が多いなど, 興味ある相違点を列記しており, 今後の検討課題を提唱している. 治療は基本的には手術による全摘出である点は変わらない. 術後の補助療法の有効性については明確な evidence が得られているものはなく, 現時点では放射線治療の実施の可否についても要検討と思われる. PXA の 5 年生存率は 80%以上とされており, astrocytic tumor grade II の範疇では比較的予後良好の部類の腫瘍であるが, 再発例や悪性転化例の報告もあり定期的な経過観察が必要と思われる. 今回の報告は大変参考になる症例報告と思われる.